

京都市内の宗教者へ向けて

ゲートキーパー養成研修会

本年度も昨年度に引き続き、京都市からの委託事業として宗教者を対象とした〈ゲートキーパー養成研修会〉を開催することとなりました。ちなみに〈ゲートキーパー〉とは、「京都市自殺総合対策推進計画」によると〈地域での「気づく」「声掛け」「見守る」「繋ぐ」体制づくりの中心的役割を担う人材〉のことです。

宗教者は、死にたい気持ちを抱えた方や大切な人を自死で亡くした方と直接に接する機会が多く、対人支援における重要な担い手であるといえます。また、他の支援者とは違った宗教的な視点からの関わりは、多くの自死の苦悩を抱えた方々にとって、大きな支えとなり得る存在だと思われまます。

こうした宗教者の皆様には、本養成研修会において、具体的な関わり方や連携方法についての専門的な知識を得ていただくことで、より一層の心強い支援者として活躍していただけるのではないかと期待しています。実際に、昨年度の養成研修会をきっかけとして、Sottoの活動に加わってくださった方も多くおられます。

本年度は、参加者の皆様が、次の一步を踏み出し易くなるように、導入的要素に重点をおく研修内容にしました。特に、当事者の立場や視点で考えるきっかけとなる場を丁寧に作っていきたいと思います。

一人でも多くの宗教者が支援の輪に加わってくださることで、一人でも多くの自死の苦悩を抱えた方の苦悩が和らぐように、大切な機会として準備を進めてまいります。

(代表 竹本了悟)

〈コーヒーハウス〉 〈やじろべえの会〉

10月8日、NPO法人東京自殺防止センターが主催する居場所づくりに関わる2つの事業について所長の西原由記子さんからお聞きしました。一つは人間関係回復の場としての〈コーヒーハウス〉。もう一つは、自殺未遂をされた方が集うことのできる場の〈やじろべえの会〉です。

コーヒーハウスとは17世紀半ばから18世紀にかけてイギリスで流行した喫茶店のことで、酒を出さずにコーヒーやたばこを楽しみながら、新聞や雑誌を読んだり、客同士で政治談議や世間話をする場だったそうです。西原さんは何十年も前にそのコーヒーハウスを雑誌で知り、「コーヒーハウスのような場を作りたい！」と、東京自殺防止センターに〈コーヒーハウス〉を開設されました。なぜコーヒーハウスにそこまで引きつけられたのかをお聞きすると、「話したい人は話して、聞くだけがいい人は、ただ聞いて。それぞれが自由に好きに居ることができる場」に魅力を感じたとのこと。視察したコーヒーハウスは、まさに「それぞれが自由に好きに居ることができる場」でした。参加者のお一人が「このようにゆっくりできる場所は他にないからとても助かる」と漏らされた感想に、コーヒーハウスの特徴が集約されているように感じました。

〈やじろべえの会〉は、これまで数回開催されたものの、現在はスタッフの都合でお休み中とのことでした。会名の由来を聞くと「やじろべえは、右にいたり左にいたり大きく揺れながら、それでもバランスを保っている。人間だって同じでしょう？右に大きく揺れたり、左に大きく揺れたりするけど、全然おかしいことじゃない。大きく揺れて、それでいい。」という思いをこめて名付けられたそうです。

西原さんに居場所づくりで一番大切にしていることをお聞きすると、「参加者がそれぞれ自分を表現できること。色々と語りあうことも表現。ただ聞くだけでも表現。人の話を聞くことで、その人なりに色々と考えているんだと思う。それで十分。」とのことでした。

これまでの視察を踏まえ、当センターでは“おでんの会”を開催します。詳細は、別紙チラシまたはホームページをご覧ください。現在、一人でも多くの方に情報を届けるために広報活動にも励んでいます。チラシの配布・設置などの広報に、皆さまにもお力をお借りできれば幸いです。詳細は事務局（電話 075-365-1600）までお問い合わせください。ご協力のほど、よろしくお願いいたします。（ボランティア一期生 T.K.）

被災地ノート ②④

関心がなくてもいいから

「関心がなくてもいいから、ただ話を聞いてほしい」という声に出会った。

その男性は、これまで誰とも話をする機会がもてず、お部屋でひとり過ごされていたのだそう。震災から、1000日以上が経過した現在、「たいがいのモノは自分で買えるようになった。でも、話し相手は買うことができないからね」と、うつむきがちにおっしゃられた。

「関心がなくてもいいから、ただ話を聞いてほしい」という言葉と、うつむいた表情から、これまでこの男性が、誰にも訴えることのできない気持ちを抱えて、寂しさのなかで過ごされてきたことが伝わってくるようだった。

「ただ話を聞いてほしい」という話の中身は、震災にまつわることではない。

週に何度か子供が部屋の掃除に来ること。掃除に来てもすぐに帰ってしまい、ゆっくり話をすることもできないこと。晩酌だけが楽しみだということ。昨日のテレビ番組のことなど、他愛もないといえば、他愛もない話なのかもしれない。

しかし、この男性にとっては、自分に起きた出来事やそのとき感じた気持ちを、誰かに知ってもらいたい、誰かと分かち合いたいと願っていたに違いないのだ。

一つひとつのお話しをうかがってゆくと、話の途中で男性は、「相づちをしてくれるだけでも十分嬉しいものだね」と、笑顔でおっしゃられた。

その笑顔にはどこか、ひとりぼっちの寂しさが滲んでいるように思えた。

「関心がなくてもいいから、ただ話を聞いてほしい」

「相づちをしてくれるだけでも十分嬉しい」という言葉には、誰かと思いを分かち合う場、分かち合える時間の大切さ、切実さが込められているように感じた。

そしてそれは、この男性に限らず、また、震災を体験している、体験していないを問わず、誰にでも共通した大切さ、切実さなのではないだろうか。

「関心がなくてもいいから、ただ話を聞いてほしい」という訴えが、切なく響いてくる。

(ボランティア2期生 A.C.)

今月のことば

「ほら、見な、あんな雲になりてえんだよ。」

(山田洋次監督映画『男はつらいよ 柴又慕情』)

活動報告

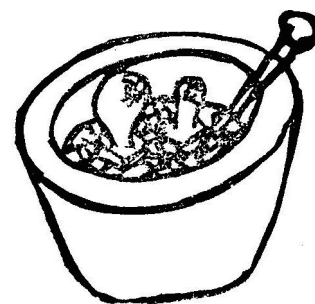
- 12月期電話相談件数…163件（無言4件、よりそいホットライン担当73件を含む）
- 相談活動委員会
グループ研修 12月19日（木）9名
- 広報・発信委員会
委員会会議 12月17日（水）5名
- グリーフサポート委員会
語りあう会 12月12日（木）7名（参加者3名）



寄付ご協力一覧（敬称略・順不同）2013年12月2日～12月31日 受付分

ご協力にこころより感謝いたします

浄土真宗本願寺派
株式会社エクザム
葛野洋明
金沢豊
西義人
高知県高岡郡・法城寺
高木愛郁



Sotto コメント

「おめでとう」と言う気持ちになれなくて、新年の挨拶に違和感をおぼえる時があります。「あけましておめでとうございます」以外に何か良い言葉はないものでしょうか。「あけまして、よろしく願います」かな…。

(N.Y.)

発行 2013年1月

特定非営利活動法人 京都自死・自殺相談センター事務局
〒600-8349 京都市下京区西中筋通花屋町下ル堺町 92
TEL 075-365-1600
URL <http://www.kyoto-jsc.jp>
Email so-dan@kyoto-jsc.jp